

20130323 東北食農研究会／第2回ミーティング議事録

「安心・安全な野菜の生産・加工・販売の強みとマーケティング
～舞台ファームの具体的事例から～」

日 時：2013年3月23日（土）17:00～20:00

場 所：宮城県仙台市一番町「茜どき」

発表者：針生信夫さん（株式会社舞台ファーム代表取締役）

参加者：参加者 13人（発表者除く）

（会社経営者、生産者、会社員、団体職員、研究員、NPO法人理事長、
行政書士・司法書士など）

目次

1. 舞台ファームの概要
2. 農業の重要な課題 ～担い手～
3. 農業の生産のこれから ～六次産業化～
4. 農業のマーケティングのこれから ～お米の場合～
5. 農業のこれからの展開
6. まとめ

発表

1. 舞台ファームの概要

舞台ファームは仙台市若林区にある農業生産法人です。業務用野菜の生産、卸販売、業務用米の生産、販売だけでなく、農産物の加工販売、また、飲食店の経営もしています。舞台ファームは農商工連携、六次化を実現させています。従業員はグループ全体にて100名になります。ただし、ここに辿りつくまでに1000回以上の失敗を経験してきました。その都度、失敗を克服してきました。

現在、51歳です。30歳ぐらいのころに、天候リスクや家族経営の限界などを検討しました。その結果、組織を持って経営しなくてはならないことに気付き、これを実行してきました。東北では舞台ファームを超えるビジネスモデルはないと自負しています。たとえば、セブンイレブン東北が販売する野菜は舞台ファームが生産しています。独占供給です。このための工夫を続けています。

2013年1月、舞台ファームは東北ニュービジネス協議会の東北ニュービジネス大賞を受賞しました。一次産業では初めてのことです。二次産業・三次産業の経営者のみなさまから表彰されました。

農業者がいかなる状況であれば幸せか、所得をどうするか、やりがいはどうするかを常に考えています。また、TPPやRCEPなど世界の中の日本という視点にて農業を考えています。このために、オランダ農業やタイ農業の現場を歩いてきました。

2. 農業の重要な課題 ～担い手～

現在の農業就業人口は約250万人です。しかし、そのうちの約25万人がカロリーベースにて約75%を生産しています。

農業就業人口は減少の一途を続けているが、今後も離農が続きます。また、農業者は所得が低いだけでなく、労働環境も劣悪です。TPPへの参加をしなくても日本の農業は壊れるところに来ています。

誰が日本人の食料を作るのか？ 農業の有力な担い手がいなくなってしまう。65歳以降での就農というのも多いのですが産業として働くというのではなくライフスタイル的なものでしかないです。

この50年で農業就業人口は約6割減ったが、個別農家の生産量は約6倍増になっています。農業の担い手問題の解決のためには、農業者をいかに経営者にしていくか、自分で問題解決をしていくようにする必要があります。

3. 農業の生産のこれから ～六次産業化～

トヨタなど二次産業であれば、材料の部品工場から製造ライン及び最終的な販売店までを統括しています。これは、サイゼリヤなどの三次産業も同様です。

農業は加工会社までの下請け的な存在でしかなく、薄利多売の構造になっています。これを逆転させたいと考えています。農業は生産だけでなく、総合的な価値があるからです。

そして、舞台ファームが日本屈指の農業法人となれば、六次産業化のベンチマークになることができると考えています。さらに、日本で一番の規模を得て、世界と交渉していくべきと考えています。

4. 農業のマーケティングのこれから ～お米の場合～

お米の消費は3人家族あれば、年間45,000円分が食べられています。一膳でいえば30円です。一日三食でも一人90円です。この価格は精米経費も入れてです美味しいお米が一日90円で食べられるということをもっと広報すべきです。

消費者のみなさんがお米の価格が安いことに気付いてくれれば、お米の消費拡大につながるはずですが、ただし、お米を一袋5キロ、10キロで売るよりも、1合ごとなど小分けで売る必要があります。消費者のニーズに合わせるべきです。

5. 農業のこれからの展開

日本を総括する必要性があります。日本は安全で、水がきれいであるとメリットに気付くべきです。また、世界で一番美味しいお米を作ることができます。品質が良ければ、世界に売ることができます。

また、農産物の加工・販売の最終出口をおさえておく必要があります。そのためには、農業者は農業者以外と連携をするべきです。たとえば、舞台ファームでは仙台市宮城野区の下水処理施設「南蒲生浄化センター」の温排水をハウスの加温に活用する構想も進めています。この

構想では、カゴメと日本IBMが生産、経営両面で支援者として、ヨークベニマルやイオン、外食大手のサイゼリヤなど大口の販売先として連携する予定です。

下水処理施設からは汚泥が出ます。これをボイラーで燃やしているのですが、これによりお湯が出ます。これを養液栽培施設にジョイントしたいと考えています。また、汚泥には肥料の一つであるリンが含まれています。また、フィルタリング技術にて下水を浄化することにより栽培用の水も摂れます。

中山間地域の棚田などの新規就農者には所得が低い者が多いです。このため長く続きません。そこで、舞台ファームの農作業を手伝ってもらい、所得と組み合わせることを考えています。

「水耕有機栽培」(有機養液栽培)の特許取得を目指しています。安価な有機野菜を普及させたいと考えています。

コーデックス委員会の「COC国際食品規格」(労働環境まで範囲としています)を取得しています。東北では舞台ファームだけです。

6. まとめ

農業における科学的な裏付けを考え、日本でどのような農業が行われてきたかを検証する必要があります。それにより、将来を見据えるための理論武装を行うべきです。土地の集積などでは世界の農業と戦うことはできません。

二次産業、三次産業の視点から日本農業の姿を考えることが必要です。

以上